2015 年度国際経済学 1(火曜日 3 限：計 14 回　　下川　雅嗣

研究室 2 号館 6 階 611 号室(内 3576)

ホームページ URL: http://pweb.cc.sophia.ac.jp/shimokawa/

グローバル化した経済及びそこから生じる諸問題の本質をより深く把握するための道具として、経済学の基本的考え方及び国際経済の基礎理論を講義する。グローバル化した経済の理解には、まず市場メカニズムの理解が必要である。次に、現代の貿易を概観し、リカードモデルや他の貿易理論を紹介することによって、貿易の利益、比較優位、労働生産性や生産要素の量と貿易の関係等について講義する。学生は、知識を暗記するのではなく論理的思考に慣れることが強く求められる。経済学の基礎的な学習をしていること（例えば、総合グローバル学部開講の「グローバル化と経済学１」の受講など）が望ましいが初心者でも努力次第では取得可能であるよう、できるだけ丁寧に初歩から教えるつもりである。なお、国際経済学 1 と 2 は連続した講義である。

※「グローバル化と経済学１」の既習生（特に FGS の学生の場合）が多い場合、「グローバル化と経済学１」の講義との重複をさけるため、重複する部分に関しては、一部、下記参考書①の該当部分を指示し、未修者はその部分を予習してもらうことになるかもしれません（初回の授業で決めます）。少なければ、まったくの初歩から始めます（その場合も参考書①の該当箇所を予習、復習することは勧められます）。

また、授業計画においては、「グローバル化と経済学１」と項目的に重複していても、視点やフォーカスをかなり変えて講義します（もちろん経済理論そのものは全世界共通ですが・・・）。

＜評価方法＞　成績評価は学期末試験による。

＜授業時間外の学習について＞

復習が重要である。この授業では、論理的思考の表現として、図（グラフ）を多用する予定である。この図示においては、完成した図を写すことや覚えることはあまり意味がなく、メカニズムに沿って自分で正しい順番で図を書けるようになることが重要である。よって、毎回の授業後に、忘れないうちに自分でメカニズムを考えながら順番どおりに図を書いていく復習が必要である。なお、復習だけではついていけそうにない場合は、指定した教科書や参考書の該当箇所を事前に読んでおくことを勧める（なお、これらの該当箇所は、授業で講義する内容や視点とは必ずしも一致しないが、参考にはなるはずである）。

また、今年度から 15 回分の授業出席が必要とのことで、学期中に幾つか講演会等を紹介するので、そのうち最低でもひとつ講演会等に参加し、その簡単なまとめを提出すること。

＜教科書＞以下３つは同一書（版及び訳者が違う）です。それぞれの短所長所は授業初回に説明します。ただし、実際の使用は 5 月中旬からなので追って購買部に、一番目のものをいれておく予定です。

クルグマン・オブズフェルド（石井・浦田・竹中他訳）(1996)『国際経済―理論と政策：Ⅰ国際貿易』第３版、新世社。

（別訳）　クルーグマン・オブズフェルド著（山本他訳）（2014）『クルーグマンの国際経済学―理論と政策（原著第８版）：上巻　貿易編』、丸善出版。

（原著）　Krugman, P. R. , Obstfeld, M. and Melitz, M. (2014), *International Trade: Theory and Policy*, 10th Edition, Prentice Hall.

＜参考書＞

①矢野誠（2001）『ミクロ経済学の基礎』岩波書店。

→経済学を基礎からきちんとやりたい人はこの本をまず読むことをお薦め。この講義の最初の部分は、「ミクロ経済学の基礎」の内容を取り扱う。これと続編である**矢野誠著(2001)『ミクロ経済学の応用』岩波書店**の 2 冊を熟読すれば、学部レベルの経済学のすべて、及び経済学的な考え方・センスの本質はほぼ修得できる。

②クルグマン（山岡洋一訳）（1997）『クルーグマンの良い経済学、悪い経済学』日本経済新聞社（Krugman, P. 1996, "Pop Internationalism," MIT press）。⇒日経ビジネス人文庫から文庫本も出ている（780 円）

→「国と国が競争していると言うのは、危険な妄想であり、経済の基本原理が理解されていないことと、国内政策の怠りを誤魔化すために政治的に利用されているものであり、そのような意識が広がれば、国内政策を一層歪め、国際経済システムを脅かしかねない。」と政治家、官僚、マスコミ、経済評論家の中に蔓延している俗流国際経済論への批判したエッセイの集まり。経済学の知識がなくてもそれなりに読むことが出来るはず。

→特に、以下の章は機会を見つけて読んで欲しい。<第１章：競争力という危険な幻想, 第２章：反論に答える, 第３章：貿易、雇用、賃金,第４章：第三世界の成長は第一世界の繁栄を脅かすか, 第５章：貿易をめぐる衝突の幻想, 第６章：アメリカの競争力の神話と現実, 第８章：大学生が貿易について学ばなければならない常識>

③石川 城太・菊地 徹・椋 寛（2013）『国際経済学をつかむ』第２版、有斐閣。

→国際貿易論に焦点を当てた国際経済学の初級入門書。エッセンスを 8~10 ページの「ユニット」ごとにまとめ、数式をできる限り用いずに図や身近な具体例で丁寧に解説。最新かつホットなトピックも充実。

④阿部顕三・遠藤正寛（2012）『国際経済学』有斐閣アルマ。

⑤ケイブス・フランケル・ジョーンズ（伊藤隆敏監訳、田中勇人訳）（2003）『国際経済学入門：①国際貿易編』第９版、日本経済新聞社。

→国際経済学の第一人者３人によるもう一つのスタンダードなテキスト。

⑥Ray, D. (1998), Development Economics, Princeton University Press.→ch.16-18.

→簡潔にまとめられている。既習者が整理のために読みには役に立つ。本全体は国際政治経済学全体への開きをもった開発経済学の大学4年生または大学院１年生レベルの標準的テキスト。

⑦矢野誠 (2005)『「質の時代」』のシステム改革：良い市場とは何か？』岩波書店。

→市場の本質的役割や性質、すなわち経済学のセンスを様々な例を用いて説明。特に日本経済の問題点を指摘。①の副読本。

［授業計画］※あくまでも目安。後期にずれ込む可能性大。

1.経済学の基本的考え方と限界Ⅰ：市場経済の原理、自発的行動の原則→①1 章、⑦
2.経済学の基本的考え方と限界ⅠⅠ：合理的選択、貧困、機会費用→①1 章、⑦
3.経済学的分析手法：経済モデル、経済変数、グラフによる経済分析→①1 章、⑦
4.ミクロ経済学の基礎Ⅰ：消費者理論→①2 章、⑦
5.ミクロ経済学の基礎Ⅱ：生産者理論→①5 章、⑦
6.ミクロ経済学の基礎Ⅲ：市場メカニズムと市場均衡→①7 章、⑦
7.現代の貿易概観→教（3 版 1 章、8 版 2 章、10 版 2 章）、④1 章
8.リカードモデル１：貿易の本質は協力、モデルの説明 →教（3 版 2 章、8,10 版 3 章）、②4 章、③1 章、⑥16 章（④3 章、⑤章)。
9.リカードモデル２：労働生産性・比較優位・貿易の利益 I→同上。
10.貿易の政治経済学の基本的理解：保護貿易の生じる理由 →教（3 版 3 章、10 版 4 章）、③7 章、（⑤6 章）
11.特殊要素と所得分配→同上。
12.資源と貿易Ⅰ：ヘクシャー＝オリーン・モデルの説明 →教（3 版 4 章、8 版 4 章、10 版 5 章）、②3，4 章、⑥16 章、（④4 章、⑤7，8 章）
13.資源と貿易 II：ストルバー・サミュエルソン効果とリプチンスキー効果→同上。
14.資源と貿易 III：要素価格→同上。